

高等学校日语专业教材系列

日本文学教程

(第二版)

主 编 吴鲁鄂

副主编 王净华

审 校 (日) 岛村辉

日本文学教程

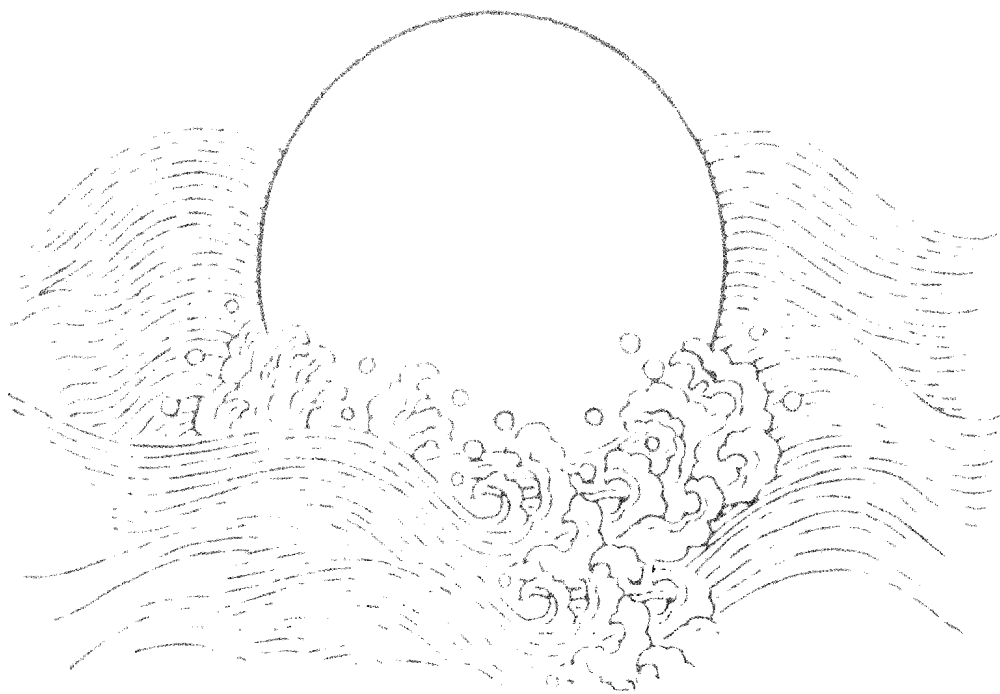
(第二版)

主 编 吴鲁鄂

副 主 编 王净华

参编人员 吴鲁鄂 武德庆 王净华 (日) 神田英敬
吴罗娟 刘 霞

审 校 (日) 岛村辉



WUHAN UNIVERSITY PRESS

武汉大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本文学教程/吴鲁鄂主编;王净华副主编;(日)岛村辉审校.
—2版.—武汉:武汉大学出版社,2012.7

高等学校日语专业教材系列

ISBN 978-7-307-09803-9

I. 日… II. ①吴… ②王… ③岛… III. ①文学研究—日本—高等学校—教材 IV. I313.06

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2012)第 101499 号

责任编辑:叶玲利

责任校对:黄添生

版式设计:支 笛

出版发行:武汉大学出版社 (430072 武昌 珞珈山)

(电子邮件: cbs22@whu.edu.cn 网址: www.wdp.com.cn)

印刷:湖北金海印务有限公司

开本: 720 × 1000 1/16 印张: 20.75 字数: 381 千字 插页: 1

版次: 2007 年 8 月第 1 版 2012 年 7 月第 2 版

2012 年 7 月第 2 版第 1 次印刷

ISBN 978-7-307-09803-9/I · 567 定价: 36.00 元

版权所有, 不得翻印; 凡购我社的图书, 如有质量问题, 请与当地图书销售部门联系调换。

前 言

《日本文学教程》是为我国高等院校日本语言、文学、文化等专业本科高年级及硕士研究生日本文学课教学而编写的教材。内容涵盖日本有文字记载以来文学发展的整个进程，由各时期时代背景简介、文学发展综述、代表作家与代表作品简介及思考和练习题几个部分组成。旨在帮助学习者从宏观上把握日本文学发展脉络及动向，从微观上了解其发展进程中各个时期主要文学形式以及代表作家和代表作品，达到认识日本文学本质的目的。

目前，国内同类教材比较少，教学的迫切需要促使我们这些站在日本文学教学一线的教师开始着手编写日本文学教材。多年来教学经验的积累和对日本文学不断深入的研究探讨使我们有了编写好《日本文学教程》的信心。本着史实性、综合性、可读性的三个原则，在编写上，参照中日两国权威史实资料，经过比较选择，尽可能客观公正地再现日本文学历程的原貌。同时充分考虑到我国高等院校学生知识框架结构的需要和教学实际运用的现状，以通俗易懂的语言、丰富多样的形式完成了编撰工作。应该说本教材既保持了史类教材的严肃性，有较宽泛的知识性，方便课堂教学使用，也有较强的可读性和趣味性，有助于广大日语学习者进一步认识日本、日本人及日本文化。

本教材的编写主要由主编和副主编担任，其他参编人员承担了部分章节的编写任务和资料的收集、文字处理工作，特此说明。本教材自2007年初版发行后多次印刷发行，经过反复的教学实践、广泛听取使用院校反馈的意见，本次修订除更新研究信息外，对“现代文学”部分进行了增补，加大了平成时期文学的分量。在本教材重新修订出版发行之际，特别要向高等学校日语专业教材系列（日本文学教材系列有：《日本文学教程》、《日本古典文学选读》、《日本近现代文学选读》、《日本短篇小说选读》）的策划者武汉大学出版社编

审王春阁老师、叶玲利主任表示衷心的感谢。由于编者能力有限，错误在所难免，欢迎各位同仁在使用的过程中如果发现有不当之处，提出批评指正，以便我们更好地完善本教材。

主编的 E-mail 地址：wulue 899@21cn. com.

主编：吴鲁鄂

2012 年 5 月 27 日

目 録

第一章 上代の文学	1
1. 時代の背景	1
2. 文学の流れ	2
3. 文学の特徴と理念	9
4. 代表的な作品	10
『古事記』——史書・日本最古の書籍（対内的）	10
『日本書紀』——史書・日本最古の書籍（対外的）	12
『風土記』——土地に伝承する神話・説話	13
『万葉集』——現存する日本最古の和歌集	14
『懷風藻』——現存する日本最古の漢詩集	18
5. 思考問題	19
6. 練習問題	19
第二章 中古の文学	23
1. 時代の背景	23
2. 文学の流れ	24
3. 文学の特徴と理念	34
4. 代表的な作品	35
『古今和歌集』——最初の勅撰和歌集	35
『竹取物語』——日本に現存する最古の物語	38
『伊勢物語』——最初の歌物語	40
『源氏物語』——日本文学の最高峰となる作品	41
『大鏡』——平安時代後期の歴史物語	44
『今昔物語集』——日本中古最大の説話集	46
『土佐日記』——新しい文学領域の創造	48
『枕草子』——最初の随筆	49
5. 思考問題	50
6. 練習問題	51

第三章 中世の文学	55
1. 時代の背景	55
2. 文学の流れ	57
3. 文学の特徴と理念	73
4. 代表的な作品	74
『方丈記』——人生の無常観を基調に	74
『徒然草』——死・人生・自然への深い省察	77
『平家物語』——軍記物語の最高傑作	79
『太平記』——儒教の道德観と仏教の因果論とが根底に	82
『新古今和歌集』——和歌の至りついた最高極地	84
『小倉百人一首』——広く民衆の中に浸透している和歌	89
5. 思考問題	90
6. 練習問題	90
第四章 近世の文学	94
1. 時代の背景	94
2. 文学の流れ	96
3. 文学の特徴と理念	117
4. 代表的な作家と作品	118
井原西鶴——町人文学の確立者	118
代表的な作品——『好色一代男』	119
松尾芭蕉——俳諧文学の確立者	121
代表的な作品 I——『芭蕉七部集』	122
代表的な作品 II——『奥の細道』	124
上田秋成——前期（上方）読本の最高峰	125
代表的な作品——『雨月物語』	126
滝沢馬琴——江戸後期における戯作界の第一人者	127
代表的な作品——『南総里見八犬伝』	127
本居宣長——日本国語学の大成者	128
代表的な作品 I——『古事記伝』	129
代表的な作品 II——『源氏物語玉の小櫛』	129
与謝蕪村——みずみずしい青春性・鮮烈な印象	130
小林一茶——貧窮と孤独に苦闘する人生詩	132

代表的な作品——「一茶発句集」	132
近松門左衛門——日本最大の劇詩人	133
代表的な作品 I ——「曽根崎心中」	135
代表的な作品 II ——「心中天の網島」	135
5. 思考問題	136
6. 練習問題	137
 第五章 近代の文学	140
1. 時代の背景	140
2. 文学の流れ	146
3. 文学の特徴と理念	190
4. 代表的な作家と作品	190
仮名垣魯文——東京時代への過渡期の代表作家	190
代表的な作品——「牛店雑談 安愚楽鍋」	190
坪内逍遙——写実理論の主張と実践	191
代表的な作品——「小説神髓」	192
二葉亭四迷——言文一致の文体の先駆者	192
代表的な作品——「浮雲」	193
尾崎紅葉——「である」調の言文一致体の完成者	195
代表的な作品——「金色夜叉」	196
幸田露伴——紅露時代を築いた理想主義者	197
代表的な作品——「五重塔」	198
樋口一葉——明治女流文学第一人者	199
代表的な作品——「たけくらべ」	199
森鷗外——漱石と並ぶ近代文学の二大巨峰	200
代表的な作品——「舞姫」	202
泉鏡花——超現実的な神秘の世界	203
代表的な作品——「高野聖」	204
国木田独步——自然美の再発見	205
代表的な作品——「武蔵野」	205
与謝野晶子——近代女性像を創る情熱の歌人	206
代表的な作品——「みだれ髪」	207
島崎藤村——自然主義の代表作家	207
代表的な作品——「破戒」	208

夏目漱石——反自然主義の立場の余裕派	209
代表的な作品 I ——『吾輩は猫である』	211
代表的な作品 II ——『心』	211
志賀直哉——白樺派の中心人物	213
代表的な作品 I ——『城之崎にて』	214
代表的な作品 II ——『暗夜行路』	215
武者小路実篤——白樺派の理論的指導者	216
代表的な作品——『お目出たき人』	217
谷崎潤一郎——耽美派の代表作家	217
代表的な作品 I ——『刺青』	218
代表的な作品 II ——『細雪』	219
芥川龍之介——芸術至上の虚構の文学	219
代表的な作品——『羅生門』	221
葉山嘉樹——労働者の生命力を芸術的に描く	223
代表的な作品——『セメント樽の中の手紙』	224
小林多喜二——権力に立ち向かう革命作家	225
代表的な作品——『蟹工船』	225
川端康成——日本人初のノーベル文学賞受賞者	226
代表的な作品——『伊豆の踊子』	227
堀辰雄——知性と叙情の融合という独自の作風	229
代表的な作品——『風たちぬ』	229
中島敦——近代人の自意識を追究	231
代表的な作品——『山月記』	232
5. 思考問題	233
6. 練習問題	234

第六章 現代の文学	239
1. 時代の背景	239
2. 文学の流れ	243
3. 文学の特質と理念	271
4. 代表的な作家と作品	273
宮本百合子——不屈の日本共産党員・革命の作家	273
代表的な作品——『播州平野』	274
太宰治——自虐的な反俗の文学	275

代表的な作品——『斜陽』	275
野間宏——戦後文学の旗手	276
代表的な作品——『暗い絵』	277
梅崎春夫——戦後派文学の旗手	278
代表的な作品——『桜島』	279
大岡昇平——極限状況の人間を見つめる文学	280
代表的な作品——『野火』	280
武田泰淳——人間存在の根源に迫る文学	282
代表的な作品——『司馬遷』	282
三島由紀夫——独自の耽美的なロマネスク世界	283
代表的な作品 I ——『仮面の告白』	284
代表的な作品 II ——『金閣寺』	284
安部公房——もっとも前衛的な文学者	285
代表的な作品——『けものたちは故郷をめざす』	286
井上靖——近代日本の稀有な国民文学者	287
代表的な作品——『天平の甍』	288
小島信夫——当代稀有の作家	289
代表的な作品——『抱擁家族』	290
遠藤周作——人間の罪や弱さと神の愛の文学	290
代表的な作品——『沈黙』	291
大江健三郎——人間共通の問題を見つめる作家	292
代表的な作品——『万延元年のフットボール』	293
村上春樹——生態と心理を描く現代的な叙情	294
代表的な作品——『ノルウェイの森』	295
吉本ばなな——現代の生を描く新鮮で独自の世界	296
代表的な作品——『キッチン』	297
5. 思考問題	298
6. 練習問題	298
付録:	303
1. 日本文学の総説	303
2. 文学史年表	308
参考書目	322

第一章 上代の文学

1. 時代の背景

日本列島にも数千年にわたる原始時代があった。大和政権成立以前の多くの小国が分立していた頃から、桓武天皇による平安遷都（794 年）までを、上代という。この時代は上古、古代前期ともいい、またこのころの都がほとんど大和（奈良）地方にあったことから、大和・奈良時代とも言う。

日本は 6 世紀を境とし、不公正、不安定な氏族制の国家から新しい絶対的国家への転進を意欲的に起こした。この世紀の中ごろには仏教が日本に伝わり、特に聖徳太子は 7 世紀の始め、遣隋使^①を派遣し中国文化の導入と仏教の興隆に努め、また十七条の憲法を制定し天皇中心の国家意識を強調した。ついで大化の改新^②が断行され、7 世紀後半、天皇を絶対とする律令制、公地公民の中央集権国家が完成した。こうした時代の進歩発展に呼応し、文化面でも中国大陆の様式を摂取し、格調の高い飛鳥文化^③や白鳳文化^④が出現し、やがて

① 遣隋使：大和朝廷が隋に派遣した使節。推古天皇 15 年（607）と翌 16 年に小野妹子を派遣。同 22 年に犬上御田鍬を派遣。

② 大化の改新：大化元年（645）夏，中臣（藤原）鎌足ら革新的な朝廷豪族が蘇我大臣家を滅ぼして開始した古代政治史上の大改革。

③ 飛鳥文化：飛鳥時代、推古朝を中心に栄えた日本最初の仏教文化。法隆寺などの遺構・遺品などから、朝鮮を経由して伝えられた中国六朝文化の影響が強くみられ、西域文化の影響もみられる。

④ 白鳳文化：白鳳時代の文化。唐との交通により、その影響を受けた仏教美術にすぐれた作品が多い。薬師寺の東塔や薬師三尊像、法隆寺金堂壁画などがその代表。また、国史の編纂が開始され、漢詩・和歌なども盛んとなった。

奈良朝では絢爛の天平文化①が成熟していった。

2. 文学の流れ

日本における古代人の生活は、気候や地形などの自然条件に左右されることが現在よりはるかに多かった。そこで、人々は神々が自然を支配していると考え、神を祭り、神に祈る神事が発達した。ここに文学や演劇の発生の基盤が認められる。文学の原初は、うたう、おどる、かたるなどが渾然と一体をなす未分化な状態であったが、後に、祭式、宗教的儀礼などにおける呪的な力を持つ祝詞、^{のりと}宣命^{せんみょう}や、農耕儀礼などにおける広い範囲の集団的な抒情歌である歌謡、さらに叙事的な語りの神話・伝説・説話などが分立し固有の表現を持つようになった。

▶ 祝詞と宣命

上代には、言葉には神秘的な霊が宿するという「言霊信仰」^{ことだま}があり、よい言葉や美しい言葉を唱えと^{さいわい}幸が現れ、悪い言葉を唱えと^{わざわい}禍を招くと考えられてきた。そこで、祭りやまつりごとでは、言葉の効果を期待し、よい言葉や美しい言葉を使うことに努め、これが文学を成立させることになる。

「祝詞」は、原始時代の^{きとう}祈祷や^{じゅごん}呪言から発しており、これが、征服戦の勝利者となり最後まで自分たちの祭祀の場を保存することができた大和朝廷の中に伝えられたのである。それらは皇室の安泰と国民の繁栄を祈願する律動に富んだ詩章を持つ語り物であり、宮廷の儀礼の中で豊作祈念や悪病退治

① 天平文化：天平年間を中心に栄えた文化。唐および西域地方の影響を強く受けて国際的な性格を帯び、鎮護国家思想に基づく仏教興隆政策のもと、仏教美術の黄金時代を作り上げた。東大寺法華堂の諸仏や、正倉院御物などに代表される。

のために神に語りかけられるものであった。

しきしま やまと ことだま さき
磯城島の日本の国は言霊の幸はふ国ぞま幸くありこそ

（『万葉集』柿本人麻呂）

〔歌意〕 日本は言霊が幸いをもたらす国であるよ。

「宣命」は国家の意志、天皇の意図を臣下に伝える文章の中で、漢文の詔勅しょうちよくに対し、日本の国語で記された文をいう。表記法には新しい工夫がされており、用言の語尾や助詞などは漢字を一字一音式に仮名のように用い、小字で割り書きしてある。この表記法がいわゆる「宣命書き」である。

如此久乃良被天津神被天磐門乎押披氏天之八重雲乎、伊頭乃千別爾千別氏所聞食武。

（『続日本紀』）

〔書き直し文〕 かく宣らば、天つ神は天の磐門を押し披きて、天の八重雲を、いつの千別に千別て聞こしめさむ。

大和時代の宣命で今に残っているものは延暦16年（797）に編集された『続日本紀』に載せてある、文武天皇の即位の時のもの以下62編である。

▶ 歌謡・神話・説話

原始時代の歌謡がどのようなものであったか定かではないが、おそらく簡単で、感動を表すことばが多く使われていたと思われる。素朴な感動の叫びは、韻律を伴った整った歌詞として成長し、繰り返し歌われるようになり、そして歌謡として定着した。

今はよ 今はよ ああしやを 今だにも 吾子よ、今だにも吾子よ

（『日本書紀』）

〔現代語訳〕 今はもう、今はもう、あははは、お前らよ、せめて今だけで

4 | 日本文学教程

も、お前らよ。

歌謡といえば注目すべきものには、男女が集まり、歌舞を楽しみ、愛を語らう歌垣^{うたがき}①があり、古典の中では、筑波山^{つくばさん}（茨城県）や杵島^{きしま}が岳^{たけ}（佐賀県）などの歌垣^{うたがき}が伝えられている。

また、自然界の支配者である神々を恐れ敬う信仰心から、神々の活動を物語った神話や、氏族の歴史や祖先の物語を主とし話の展開に興味の中心をおく説話②が生まれた。

神話——『天の岩戸』神話

〔筋〕 スサノオの命^{みこと}が天上に上がって、天照大御神の営んでいる農耕の事業を妨害するので、天照大御神^{あまて}がこれを嫌って岩戸に隠れ、天地が暗くなった。そこで諸神が岩戸の前に集まって祭りの行事をし、その結果、天照大御神が岩戸を開いて出現し、スサノオの命を地下の国へ追放する。

説話——『浦島説話』

〔筋〕 水の江の浦嶋の子が、神仙の堺に行き、亀姫と結婚し、三百年を経て帰郷したというような、海中の別世界を訪れるという筋の物語であり、日本の西部の海岸の各地に伝わっていた。当時新しく日本に伝わった中国人の神仙思想の影響が見られる。その一つは海幸山幸の物語ともなった。

これらは、神事ばかりでなく、農耕、狩猟、恋愛、送葬など、日常の生活を通して、口から口へと語り継がれていった。文学はそのような集団生活の中で生まれ、育まれてきたのである。

▶ 口承文学

このような口から口へと語り継ぎ、歌い継がれた神話・伝説・歌謡・祝詞

① 歌垣：春秋、山上や海辺に男女が集まり、歌舞に興じて結婚相手を選んだ古代の風習。

② 神話・伝説なども含み、広く説話と呼ぶこともある。

など、あるいは専門的な伝承者の^{かたりべ}語部^①によって歌い継がれた文字によらない文学を口承（伝承）文学という。後に、文字による記載文学が文学の主流となるが、口承文学も独自の文学として現在に至るまで存在しつづけている。ことに古代前期の口承文学は、日本文学の始源を知るのに重要な価値をもっている。

▶ 外来文化の伝入

大和政権は、その力をさらに強固にするために、律令国家体制の他にも積極的に中国大陸の文化を摂取した。遣隋使・遣唐使^②の派遣はその姿勢の表れである。そのため、飛鳥文化・^{あすか}白鳳文化・^{はくほう}天平文化など、大陸の影響を強く受けた異国的な文化が栄えた。

仏教の伝来は、6世紀半ばごろと推定される。^{しょうとくたいし}聖徳太子らによって国家の保護を受けることとなり、^{とうだいじ}東大寺をはじめとする寺院の^{こんりゅう}建立や、経文の研究、^{るふ}流布が活発に行われた。また、それまで、^{じゅじゅつ}呪術的ではあるが宗教といえるほどのものをもっていなかった人々の精神的土壌に大きな影響を及ぼした。

漢字・漢籍は、五世紀頃には日本に伝わっていたと考えられる。推古朝（592—628）のころには、聖徳太子の「十七条憲法」が漢文で書かれているように、漢詩文を自由に操る知識人が多く存在するようになった。天智天皇の時代（668—671）には漢詩文が奨励され、以後の漢文学隆盛の基礎が築かれた。奈良時代に入り藤原宇合の詩集や石上乙麻呂の『銜悲藻』が編まれた

① 語り部：朝廷に仕え、旧辞・伝説を語った職人。

② 遣唐使：古代、日本から唐に派遣された使節。舒明天皇2年（630）、犬上御田鎌の派遣を最初とし、十数回派遣された。中国の制度・文物の輸入が主な目的で、数百名が数隻の船で渡航。政治・学問・宗教などに多くの貢献をしたが、寛平6年（894）に菅原道真の建議で中止。

が、現代にまでは伝わらなかった。現存する最古の漢詩集は天平勝宝三年(751)に成立した『^{かいふうそう}懷風藻』である。『懷風藻』の詩は儀礼的な宴席での作が多く、中国の詩を形式に模倣する傾向が強かった。

中国文学は次第に日本文化の中に根を下していき、7世紀には白鳳文化として花が開いた。中国の詩文の影響も宮廷の間にひろまり、文学に対する個人個人の関心や意識も強くなっていった。その中で、漢詩を作る人たちや^{かきのもとのひとまる}柿本人麻呂のような優れた宮廷歌人が現れた。文学がようやく個人の営みになってきたのである。しかし、漢詩文は、日本人にとって発音も文法も日本語とはまったく異なる外国語であった。そこで漢字の音に、その意味に当たる日本語を当てはめた訓を工夫し、さらに漢字の音から^{まんようがな}「万葉仮名」①「宣命書き」②などが発明された。この発明により、6世紀末ごろから日本文学は新しいページを開くこととなった。文字の使用は集団の口承文学の記録を可能にしたばかりでなく、個人の芸術的感動の所産を文学として定着させる役割を果たした。日本文学は、これにより記載文学の時代へと移っていくのである。

▶ 記載文学の時代

このように、中国大陸から学んだ漢字は次第に実用化され、漢字による文学の記述化も行われた。大和政権は、地方に分立する各氏族を皇室中心の系譜の中に位置づけ、自らの権力強化を図るため、史書・地誌の編纂を行い、記録した。8世紀になってから生まれた『古事記』、『日本書紀』、『風土記』、『万葉集』などがそれで、国家統一以前に口承されていた神話・説話・

① 万葉仮名: 漢字の表す意味とは関係なく、漢字の音や訓をかりて国語の音を表記するのに用いた漢字。『万葉集』に多く用いられているので、この名がある。

② 宣命書き: 漢字の正訓を中心とし、活用語尾などを右下に万葉仮名で小さく書く表記法。

